

大津 2020.4

No.10

まちづくりだより

内容

- ◆～コミュニティ計画推進市民会議・・・P1から連携協議会へ～
- ◆南海トラフ発生時の大津版行動計画・・・P2・3(小説風)
- ◆学校だより・・・・・・・・・・・・・・・・P4
- ◆ふないれ食堂・・・・・・・・・・・・P4

～コミュニティ計画推進市民会議から地域連携協議会へ～

平成8年、大津では高知市のコミュニティ計画の取り組みに沿って、大津地区における生活環境の保全、整備の課題等を検討するコミュニティ計画策定市民会議を発足しました。計画策定市民会議委員は、大津全域の町歩きをしたり、住民の方々から話を聞いたりして課題点を抽出しました。その課題点を各パートに分類し、さらには短期的に処理するもの、中長期的に処理するものに分けて、指針を作成しました。それが、「水と緑、歴史と文化の里大津」というスローガンに基づいた大津地区の町づくりの目標となり、平成10年1月に高知市に提案致しました。

そして、同年2月には、コミュニティ計画を実践する為のコミュニティ推進市民会議を立ち上げました。しかしながら、これから実行というときに大津は98豪雨という未曾有の浸水災害に見舞われました。被災後、約1年間は災害復旧、復興で活動を停止せざるを得なかったのですが、平成11年9月より具体的な活動を開始しました。現在に至るまで、幾度か大津の町歩きを行うと同時に例会を開催し、出席委員から課題点を吸い上げることにより、高知市行政とタイアップしていくつもの課題をクリアしてきました。

しかし、時代は令和に移行し、コミュニティ計画においても世情の変化に伴って、そのシステムを修正する必要性が生じ、令和2年3月末日をもって、22年間活動してきた大津地区コミュニティ計画推進市民会議を解散する運びとなりました。今後は、大津地区の各種団体の代表者で構成する地域連携を目的とした、大津まちづくり連携協議会が中心となって、大津の町づくりを担うこととなります。

大津の住民の方々には、計画策定市民会議から計画推進市民会議の活動に、24年以上に渡りご協力、ご理解頂き誠にありがとうございました。これからは、住民の皆様方からのお声を吸い上げるシステムが変わります。まずは、各居住地区の町内会長にお声がけ頂きたいと思います。更には、まだ計画中にはありますが、ご意見箱のようなものを設置する事も考えています。

日々の生活における課題点は言うに及ばず、大津地区では近い将来発生する南海トラフ地震に対しての地域力の向上も図っていかなくてはなりません。是非、皆様方の活発なご意見を頂き大津の町づくりを推進していく所存ですので、引き続きご協力のほどお願い申し上げます。

南海トラフ発生時の大津版行動計画を小説風にしてあります。  
前号の第9号からの続きになっておりますので、前号と合わせてお読みいただき、皆さんの防災意識を高めていただければ幸いです。

避難して、10分も経たないうちに、妻が小さな声で「お手洗いにいきたい」とつぶやいた。避難ビルには、市から常設してある簡易トイレがあると聞いていたが、周りには見当たらない。困っていると、丁度前の扉が開いて、その部屋の住人が出てきた。無理は承知でお願いしたところ、「気軽に使ってください」との承諾をもらい、この件はなんとか、処理出来た。しかし、水道は止まっているはずだが、どうやって水を流したら良いのだろう。そうするうちに、周りにどよめきの声が上がった。「津波だ！」目の前には、堤防から越水が始まった。かなりの量のみずが、流れ込んでくる。瞬く間に、ビルの一階は水没した。このまま、水位が上がってきて、3階まで来たらどうしようかと思っただが、それからは、多少の満ち引きがあるものの、なんとか二階は水没しなかった。津波は、8時間にわたり、押したり、引いたりすると聞いていたので、そこで明け方までじっとした。

丁度、明け方頃だったろうか、持っていたスマホが弱々しく揺れた。見たら、秋田に嫁いでいる娘からのメールであった。「大丈夫？」という書き込みがあった。急ぎ、「なんとか、大丈夫！」と打ち返したが、送信不能になっていた。朝焼けが、淋しいほどに綺麗だった。いつも、見慣れている風景は一変し、辺り一面は1mぐらいの深さの水に覆われていた。

2月3日 15時位にやっと水が引いた。3階から、地上に降りた時の、感覚は特別なものだった。宇宙から帰還したことはないが、丁度こんな感覚だろうと思った。妻と話し合った結果、一度家に帰ってみようということになった。ぬかるんだ道を10分ぐらい歩いて帰ると、その間に4、5軒の木造家屋が倒壊していた。ただ、駐車していた車も流された形跡もなく、津波自体が直接波ではなく、流れもそれほど思われた。住み慣れた家に帰ると、何箇所か窓ガラスは割れているものの、外観は特に問題があるようには見えなかった。

(避難所生活編に続きます)

水と食料品の備蓄は、常日頃から一週間ほど確保していたものの、困るのは電気がこないことと、トイレの問題であった。自宅はなんとか住めそうと言っても、公的な援助が機能し始めたのかどうかといった、外の世界の事が全くわからない。更には、震度5クラスの余震が、一日に何度も発生する。それに、一番困ったことは、家具に挟まれた妻の足の傷が、化膿し始め痛みを訴える。プライバシーの問題はあるが、妻と相談して避難所に指定されていた小学校に行ってみようということになった。

歩いて10分ぐらいの小学校に行ってみると、まさにそこは避難してきた人、人でごった返していた。体育館入口で受付業務をしてくれている人は、近所の顔見知りの人であった。話を聞いてみると、地震発生から3日経つが、市からの援助はまだ来ないとのこと。しかし、体育館に備え付けられている非常時の電話にて、ある程度の情報は得られているとのことであった。ただ、これもバッテリーの残量が三分の一ぐらいになっていて、これがなくなったら、外部との情報のやりとりは完全に遮断されるとのこと。うる覚えで、確か市の防災倉庫に発電機があったのを思いだし、それを言ったところ、津波で使えなくなってしまうとのこと。なんの為の防災倉庫かと情けなくなった。

食料、水等については、避難してきた人が備蓄していたものを配分してなんとかやりくりしているところ、最初に避難してきた人達がトイレを使用してしまい、後片付けに苦労したが、今は市があらかじめ準備していた簡易トイレでなんとかやりくりしているとのことであった。ただ、簡易トイレの数も少なく、処理剤も減ってきてこれまた後、数日で支障を来しそうで不安げであった。

それはさて置き、スペース的にも建物内には居住するところはないようで、運動場なら、車があればなんとかできるとのことである。自宅の駐車場は比較的高いところにあり、車は無事であった。妻と相談して、車中泊で公的援助が来るまではやり過ごそうということにした。

残るは、妻の足の怪我の処置である。これには、困った。近くの医療機関は、当然やっていない。〇〇病院が、災害時の指定病院になっているとのことであるが、距離的にいえば3キロほど離れている。とてもではないが、やっとならば歩いて妻をそこまで歩いて連れて行くのは難しい。車は動くものの、道には、凹凸の起伏ができ、とても車で走れる状況にはない。どうしようかと悩んでいたら、「あれ、桜木さんじゃないですか。無事でしたか。良かったですね。」って声をかけられた。見たら、日頃お世話になっている歯科医の先生だった。これこれ云々で、困っていると言くと、「うちに抗生剤おいていますから、持ってきてあげますよ。」ってありがたいことに、薬をもらった。これで、なんとかやり過ごせると感謝したが、避難所には怪我をしている人も見受けられるし、今でも子供が産まれそうな妊婦さんも居る。どのように、対応したらいいのか、非常に不安である。

その日の夕方から、小学校の運動場で車中泊することになった。うちの車は、ワンボックスカーだったので、セダンの車と比較したら居住する分には楽であった。しかし、それでも二人が寝泊りするのは結構きつい。ガソリンを入れたばかりだったので、満タンだったのであるが、夜の寒さでエンジンをかけ暖房をつけるのは、隣に停めている車の人たちにとってうるさいので、はばかり。家から、布団と衣服は持ってきたものの、やはり寒い。それに、簡易トイレはあるものの、夜トイレに行くのは、真っ暗だしとても怖い。うちの妻は必ず、私を起こして一緒に言ってくれという。

次の朝、起きてすぐ車中泊しているひとに注意があった。何でも、狭いところにずっと動かずに居ると、エコノミー症候群になってしまうとのこと。必ず、一時間に一度は車外に出て、身体を動かしてくださいと言われた。しかし、水で戻した、アルファ米はまずい。災害訓練で食べた時は、お湯で戻したものだっから、何とか食べることはできたが、まあ、何でも食べないと、この状況下では文句は言えない。

発災から、6日後やっと自衛隊部隊がやってきた。何か、今までの人生の中で一番嬉しいことのように思われた。自衛隊の炊き出し部隊が豚汁を作ってくれた。ほぼ、一週間ぶりの暖かい食事が身体全体に染み渡っていく。長い人生の中で、本当に普通だったものが、この一週間で完全に壊れた。しかし、泣き言を言っても仕方がない。また、一歩ずつ、元の生活を取り戻さねばならない。

東北の高僧が、「地震、津波なんてものは、地球がくしゃみをしたぐらいのものだ。大体、津波が来るところに住んでいる人間が悪い。」って言っていたのを思い出した。人生ってなんだろう？この一週間で、本当に考えさせられた。



## 学校だより

## —高知中央高等学校—

大津地区並びに大津地区コミュニティ計画推進市民会議の皆様方には、日頃から大変お世話になっており、感謝申し上げます。本校では、普通科・看護学科あわせて1,000名を超える生徒・学生が在籍し、日々、勉学やクラブ活動等に熱心に取り組んでいるところでございます。

さて、本校では、本年度、女子硬式野球部を創部しましたところ、1年生11名の入部があり、その練習は活気あふれるものとなっています。刺激を受けたわけではないとおもいますが、男子の硬式野球部は、初めて秋季県大会に優勝し、これも初めてとなる四国大会出場を果たしたところでございます。また、このところ好成績を残してきました男子・女子のバスケットボール部やラグビー部も全国大会に出場し、それぞれに持ち味を発揮しました。日々の練習の成果を活かし、全国の強豪校と互角の試合ができる日も遠くないものと期待しているところでございます。

そして、この1月には、全国ダンスドリル冬季大会におきまして、本校ダンス部が、出場した4部門のうち3部門で優勝するという好成績を残すことができました。一度、ご覧になれば分かっていただけとおもいますが、観ている私たちの方も自然と身体が動き始めます。

これからも、生徒・学生たちは、勉学でもクラブ活動でもそれぞれの分野で懸命に取り組んでまいりますので、ご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。



## ふなイレ食堂

現在、子ども食堂は全国約3,700箇所 高知県では約70箇所で開催されています。

当初の目的は、貧困家庭の子どもたちに食事を提供することでしたが、最近は多くの運営団体が地域のみなさまとの交流の場として提供しています。

ふなイレ食堂は、大津地区の社会福祉協議会の事業として、子どもたちと地域のみなさんとのふれあいの場として2018年8月より開催しています。

現在、開催場所は大津ふれあいセンターの2階会議室で毎月第2日曜日11時30分から13時30分の間食事の提供をしています。スタッフは約20名で食事づくり、食堂の運営等を担当し活動しています。近年は、高知市を含め全国的に少子高齢化の問題が取り上げられ、防災や福祉等の支援活動に地域力の向上が言われています。地域の多くの世代のみなさんがいろいろなことを話し合い、交流しお互いを知ってもらうための場としてふなイレ食堂を利用していただき、そのほかの地域の行事にも参加してもらえようになれば大津地区も活性化していくのではと期待しています。



今後も、地域のみなさまに喜んでいただけるよう取り組んでまいりますので、ご協力よろしくお願いたします。また、食材等の寄付などは随時受け付けておりますので、ご連絡いただければ幸いです。



▲12月8日開催状況 参加人数94名